

民俗学者にとって学史とは何か

——「比較学問史」の視点から——

坂 野 徹*

1. はじめに

今回のシンポジウム報告の冒頭で、重信幸彦氏は、近代文学の研究者から「民俗学って、変ですよ、なんでそんなに学史を一所懸命やっているんですか？」とたずねられ、戸惑ったというエピソードを紹介している。それに対する重信氏のとりあえずの回答は、次のようなものであった。近代文学研究においては、「文学」と名付けられた対象が既に外在しているとみなしやすいのに対して、民俗学では、研究の対象を指示する「民俗」そのものが民俗学によって構築され流布された概念にほかならない。したがって、民俗学は常に学そのものの有り様を問うことと抱き合わせて対象を眼差ささねばならない宿命を抱えている、と重信氏はいう。

確かに、科学史の立場から民俗学を含むフィールド系の学問の歴史に関心を抱き、20年以上、民俗学者と親しく付き合ってきた私にも、この文学研究者の素朴な疑問にはうなずけるところがある¹⁾。もちろん、私が知る民俗学者がとりわけ学史に対する関心が高い人たちだということもあるだろうが、そのことを抜きにしても、人文科学の中でも、民俗学が特に学史への関心が高い領域であることは確かだと思われる。今回の国際シンポジウム自体がその一つの実例だが、それ以外に、例えば、戦後のアカデミズム民俗学を引っ張ってきた福田アジオ氏が近年、『日本の民俗学——「野」の学問の二〇〇年』[2009]、『現代日本の民俗学——ポスト柳田の五〇年』[2014]といった批判的観点からの学史研究書を矢継ぎ早に刊行していることを付け加えてもよい。

それでは、民俗学における学史研究をどのように評価すればよいのだろうか。もとより、私は民俗学者ではないため、重信氏の指摘する「民俗」という概念自体の構築性という問題について踏み込んだ議論を行う力はない。そこで、ここでは、私がある程度状況に通じている民俗

* さかの とおる 日本大学経済学部

学の隣接領域—自然人類学、文化人類学（民族学）、考古学——における学史、さらには私自身の専門である科学史と民俗学史の比較から考えてみたい。

本シンポジウムは、日・中・韓・台の民俗学史を比較することを通じて、我々が所与のものとしている民俗学（史）のイメージを刷新しようというものであった。そうしたシンポジウムの趣旨を踏まえつつ、日本における諸学問分野の学史の中で民俗学史を考える、いわば「比較学問史」の観点から民俗学における学史研究の位置を確かめようというのが本論のささやかな目論見である²⁾。

2. 民俗学史とは何か（1）——隣接領域との比較から

まずは自然人類学の領域からみていこう。日本の自然人類学は、明治期以来、「日本人」の起源をめぐる研究を中心に発展してきたこともあり、伝統的に日本人起源論の研究史に対する関心は高い。かつての自然人類学者による日本人起源論の概説書では、学史を踏まえて自説を述べる構成のものが多く、二重構造モデルで知られる埴原和郎氏（1927-2004）などが盛んに日本人起源論を発表していた90年代あたりまでの著作には学史が掲載されるのが常であった。

ただし、（自然人類学が自然科学の一分野である以上、ある意味で当然のことだが）自然人類学者による学史はあくまでも学説史中心の記述である。近年では自然人類学自身の間でも、従来、自分たちが依拠してきた「人種」という概念を問い直そうという機運が高まっており³⁾、さらに日本全国の大学に収蔵されている人骨標本の来歴についての調査も進められている。だが、管見の限り、自然人類学者には、ネガティブな面も含めて自らの学の存立基盤そのものを歴史的観点から問い直す姿勢は乏しいように思われる。

さらに、ここで注意しなければならないのが、90年代以降における人体計測学的方法からゲノム研究への研究前線のシフトである。こうした状況下、近年では日本人起源論の領域に自然人類学以外でトレーニングを受けた研究者も参入するようになったことから、かつてに比べると学説史に対する関心自体も低下しているようにみえる。

では、民俗学と密接な関わりをもつ文化人類学（民族学）はどうか。日本の文化人類学者のあいだで、通常の学説史の枠を超えた、研究と社会の関わりを含めた歴史の本格的検討が進められるようになったのは、90年代以降のことだといってよい。文化人類学における学史の批判的検討がこの時期まで行われなかった背景には、戦後日本の文化人類学の基礎を作り上げた中心的研究者のほとんどが戦時中、占領地・植民地における民族政策と関わる研究を進めており、その歴史に踏み込むことがタブーだったという事情もあるようである。

さらに、90年代は、「表象の危機」をめぐる議論が日本で盛んに行われた時期であり、この時期の文化人類学史への関心の高まりに対する欧米の研究からの影響も見逃すことはできない。

ただし、(学史に関心を持つ研究者は、文化人類学者全体からはそもそも少数だが)「表象の危機」をめぐる議論が一段落した現在、文化人類学者自身による学史研究は、かつてに比べるとやや低調になっているようにもみえる。

一方、考古学は、人類学とは対照的に、ある意味で民俗学と同じくらい学史研究の盛んな学問領域だといってよい。戦後、考古学の教育を行う大学数が急増し、民俗学者に比べ考古学(関係)者の数が圧倒的に多いこともあって、学説史を中心に、学史関係の業績が大量に積み重ねられている。また、多くの大学で考古学教育のシステムに学史が組み込まれ、2011年には、学史(考古学史)に特化した学会(日本考古学史学会)も設立されたほどである。こうした考古学における学史重視は、石器や土器などの個々の考古学的遺物を調べる際、まずは先行研究を押さえる必要が出てくることなどに起因している。

ただし、民俗学における学史研究との違いは、他の学問領域との接点に乏しいことである。60年代末以降の大学批判、学問批判の潮流の中で、考古学の社会的責任を批判的に捉え返そうとする考古学者も少数ながら存在するが、考古学者の数の多さもあって、考古学史研究はもっぱら考古学者及び考古学ファンのあいだで生産・消費されており、異分野の人間で考古学者の書く学史に関心をもつ者も少ない。すなわち、あくまでも、その学史研究は「考古学者による考古学者のための考古学史」という性格が強いように感じられる。

以上のような隣接領域におけるそれと比べたとき、改めて民俗学における学史研究の特徴はどこにあるのといえるだろうか。それは、第一に、文化人類学者や考古学者の一部を除いて、他の領域にはあまりみられない、学問のあり方を根本から問う意識だということができるだろう。すなわち、学史が、通常の学説史を越えた批判的な歴史たりえているかどうかである。例えば、冒頭で挙げた福田アジオ氏による考古学史書からは、考古学の現状に対する危機意識と、自分を含めた戦後考古学の歴史に対する批判意識が垣間見える。「功成りとげた」研究者がここまで自己批判の精神に基づく学史を書くということ自体、他の学問領域では珍しいことだろう。

そして、第二が、今回のシンポジウムが典型だが、民俗学史における他領域との協働の姿勢である。これは、そもそも柳田国男研究が他領域の研究者によって盛んに行われてきたことも関係しているだろうが、民俗学の学史はけっして「民俗学者による民俗学者のための民俗学史」にとどまるものではなく、歴史学や社会学を含め、人文科学の他の領域と応答できる学問史になっているといえる。

そして、こうした民俗学史の性格について考えるとき、見逃すことができないのが(日本における)民俗学の「在野」性へのこだわりである。そこで、こうした問題について、私の本来の専門である科学史研究と比較しながら、さらに考えてみたい。

3. 民俗学史とは何か(2) —— 科学史との比較から

周知のように、柳田国男の時代以来、日本の民俗学は「野」の学問であることを一つのアイデンティティとしてきた。今回の発表で重信氏が検討を加えた雑誌『ひだびと』と江馬修もその一例である。もちろん、学の在野性をアカデミズム研究者と在野研究者という研究者の属性に還元してしまうことには問題もあるかもしれない⁴⁾。だが、民俗学が伝統的に非アカデミズム研究者によって支えられてきたこともあり、現在でもアカデミズムの知であることにどこか座りの悪さを感じるというのが、民俗学者の一般的な姿であるように思われる⁵⁾。これは、戦前、アカデミズムにほとんど拠点を持たなかったという歴史的共通性を有する文化人類学や考古学と比べてとき、現在でも民俗学に目立つ特質だといってよいだろう。

そして、こうした在野へのこだわりが、戦後、良かれ悪しかれアカデミズム化への道を進んできた日本民俗学に際立つ問題意識だということも、今回のシンポジウムでは明らかになったように思われる。すなわち、韓国の場合とはもあれ、台湾や中国の民俗学においては今なお民俗学の制度化、アカデミズム化こそが大きな課題だということが今回の発表で浮き彫りになった⁶⁾。

だが、ここでは、民俗学における在野性こそが、その学史研究にある種の豊かさを与えていることに注意したい。すなわち、民俗学という知の本質を何処に置くかはさておき、民俗学がアカデミズムから「野」まで広がる、外延も曖昧な知の運動であったことは、民俗学の歴史を様々な社会的実践と結びついた複雑なものとしている。しかもまた、アカデミズムの知として進むのか、それともあくまでも「野」の学問であることにこだわるのか、自らの学問のアイデンティティをめぐる民俗学者自身が絶えず揺れ続けてきたことが、そうした学史をみる民俗学者の視点を複層的で豊かなものにしていないだろうか。

そしてまた、こうした民俗学における学史研究の有り様は、実は我々科学史の研究者に対して反省を迫るものであるように私には思われる。

日本の科学史研究は、アカデミズム内における制度化が遅れたため、ある世代までは科学史の教員として大学に就職するというキャリアパスなど想定されておらず、科学史の学会は、現在でも在野の研究者によって支えられている面が強いことなど、民俗学に通じるところは少なくない。

だが、現在、民俗学／民俗学史にあって、科学史家に欠けているのは、自らの学問のアイデンティティを批判的に問い直す姿勢だと思われる。科学史という学問のアイデンティティをどこに置くかは研究者によって異なるだろうが、かつて科学史が科学という営みの一部であったことは間違いない。だが、20世紀に入ると徐々に科学史は母体であった科学から離れ、一つの学問分野として自立していくことになる。もちろん、こうした学問の制度化のプロセスはな

かは必然的なことであり、科学から自立し、その外部に立つことによって、近代科学技術文明を批判的に問い直す姿勢が生みだされてきたことも確かである⁷⁾。

しかし、科学史が科学から自立し、その外部に立つということは、とりあえずは科学を外部から眺めて、仕事ができるしまうということをも意味する⁸⁾。果たして我々は、民俗学史に向かう民俗学者のように、自己の学問のあり方を問う姿勢を持ち続けているのか、今回のシンポジウムは、少なくとも私にとって、科学史という学問のアイデンティティについて再考する機会でもあったのである。

4. 結びにかえて

現在、進行中の大学改革という名の新自由主義的再編の中で、日本の大学における人文科学は、いま大きな危機を迎えている。もちろん、新自由主義的な大学や学問の再編に対して抗うことは重要だが、今後、民俗学や科学史を含めて、アカデミズム内における人文科学の有り様が大きな変容を遂げていくことは確実だろう。こうした状況下、民俗学がこだわってきた知の在野性という問題は、また新たな意味をもつことになるかもしれない。学史を振り返りつつ、民俗学の在野性をもつ可能性を問い直す作業は、これからますます重要な意味をもつという予感を最後に記しておく⁹⁾。

注

- 1) ただし、文学研究者が、文学研究の学史に無関心であるとするならば、文学という制度を問わない文学研究とは一体何なのか、と思うこともまた確かである。
- 2) 以下に述べる議論は、諸学問の学史研究の状況を概観したラフスケッチにすぎないし、民俗学者、文化人類学者にとってはさほど新鮮な議論ではないだろう。だが、さらなる考察のためのたたき台の意味はあると思われる。
なお、ここで述べた議論の一部は、2013年度九州史学研究会大会（2013年10月19日、九州大学国際ホール）における私の講演と重なることをあらかじめ断っておく。そこでの議論については、拙稿「日本考古学を読み直す——科学史からみた考古学」『九州史学』第169号（2014年5月）43-61頁を参照されたい。
- 3) 竹沢泰子編『人種概念の普遍性を問う』（人文書院、2005）所収の自然人類学者の論考などを参照。
- 4) 佐藤健二「方法としての民俗学／運動としての民俗学／構想力としての民俗学」小池淳一編『歴博フォーラム：民俗学的想像力』（せりか書房、2009）における議論などを参照。
- 5) 先ほど触れた福田アジオ『現代日本の民俗学』は、これからの民俗学が柳田国男の呪縛から離れてアカデミズム内の学問として発展していくことの必要性を説くのに対し、例えば、菅豊『新しい野の学問』の時代へ』（岩波書店、2013）は、アカデミズムに閉塞しない公共民俗学の

可能性を展望している。このように、民俗学のこれからの展望については、一見対局的ともみえる評価が存在するが、いずれも在野性にこだわっているという意味では共通性をもつ。

- 6) 中国の場合には必ずしも当てはまらないが、韓国・台湾においては、日本の植民地統治時代、基本的に日本人研究者がアカデミズムの研究を独占し、現地人が在野の位置にいたことになる。そうした植民地統治時代の学問の有り様が、解放後の韓国・台湾における民俗学史にいかなる刻印を残したのか、という問題も興味深い。
- 7) しかもまた、瀬戸口明久氏がいうように、現代の科学技術文明が、科学技術批判という外部からの批判をも内に取り込み、生き長らえていくシステムであるとするならば（瀬戸口明久「境界と監視のテクノロジー——自然と人工のあいだ」『情況』2013年11・12月合併号、43-57頁）、いま科学史研究は大きな曲がり角に来ているともいえそうである。
- 8) もちろん、科学技術は全人類の生活を根本から規定している以上、外部はありえないという見方も成り立つ。
- 9) 本シンポジウム開催時の雰囲気と私自身の問題意識の記録として、あえて加筆修正は行わなかった。予想通り（?）、その後、アカデミズム内での人文科学をめぐる状況はますます悪化する一方、2019年には「在野研究ブーム」も起こった。その後のコロナ禍の影響を含めて、今あらためて「在野性」についての考察が求められているように思われる（2021年9月25日記）。